



子どもの変化に対応した体育実践を

船富公二

60年以降、日本社会は農業中心の社会から工業化社会へと大きく変貌した。

毎年農繁期には村や町内の大人総出で助け合って働いた。子どもたちは年長の子どもがリーダーとなって仕事を手伝ったり、集団で遊びながら一日を過ごすのが常であった。そして年長の子らは遊びの方法やマナー、道具の使い方などを伝えてきた。野球の「三角ベース」もこうした子どもの遊びの伝承システムが生み出したものであった。

しかし、「工業化」は、我々の生活を豊かにしたが、一方で人々を土地から引き離し、地域の間人関係を疎遠にし「地域共同体」を崩壊させた。家庭においては「核」家族化を進行させ、祖父母から孫への遊びの伝承機会を奪い、村や町内における子ども遊びの伝承システムを崩壊させるなど、子どもの生活環境を大きく変えた。

同年齢児童の室内でのゲーム遊び（＝各々が勝手な遊びをして交わらない）と学習塾、スポーツ塾通いが、小学生の放課後の過ごし方の代表的なものになってしまっ

た。その結果、手先を使った「創作遊び」や運動遊びの経験の乏しい児童が増える一方で、スポーツ塾に通う児童も増加し特定の運動分野にだけ卓越した児童も必ずいるのが今の学校現場である。

同志会の球技実践の多くは、ボール操作、身体操作のおぼつかない低学年児童にも技術学習（＝「2：0」）が出来るようにと、ボールを持つての移動を認める「ラグバス」や「シュートボール」を教材として採用してきた。しかし、児童の実態を考慮し、「①神経系の発達が著しい幼年・小低の子どもには、『プレ学習』として様々な運動を楽しみながら経験させる事を重視し、②分析力が芽生え出す小学校中学年期を球技の『基礎技術』学習の入門期」と捉えても良いのではないかと考えるのである。

本号ではこのような考えから「球技」に絞り、伝承文化や近年の同志会実践から「球技の感覚づくり」に役立つと思われるものを列記することにした。

（ふなとみ こうじ／大阪支部）